



銀河 その構造と進化

S. フィリップス 著

福井康雄 監訳／竹内 努 訳

日本評論社 4,700円＋税 408頁

読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

私はVERA（ベラ）という電波望遠鏡を用いて、銀河系バルジや銀河系棒状構造に興味をもち運動学的な研究アプローチを試みている。そんな私に思いもよらず、本書の書評の依頼が回ってきた。ちょうどその頃私はそろそろ少し視点を変えて真横からしか見ることのできない天の川銀河（＝銀河系）だけでなく、われわれに対していろいろな向きで見ることのできる系外銀河に関する知識も新たに深めつつ天の川銀河を見ていきたいと考えるようになっていた。これは好機ということでこの書評の依頼を引き受けることにした。

本文を読んでみた全体的な印象は、冒頭の監訳者序にあるように、銀河研究に関する必要な概念が網羅的にバランス良く整理されていて、これから銀河の研究を始めたいと思ったときに、銀河研究の基礎や研究の背景を与え、地に足を付けて銀河のことを学ぶきっかけを与えてくれる一冊であり、大学の学部生から大学院修士課程の学生に適した一冊だ。そして、今の私にも最適な一冊だった。本書には、「専門的な研究への橋渡しとして、初学者、銀河を専門としない研究者への良い入門書」となることへの期待が込められている。

本書の特徴は、銀河に関する事項を広く取り扱っていることに加え、文体が口語的で読者との距離が近く、取っ掛かりやすさを感じさせるところだ。本文の内容自体も、銀河研究の中で明らかになってきた事象だけではなく、歴史的な研究の流れとともに、人物・観測装置・研究プロジェクトの名前が多数登場し、リアルな銀河研究の実情を感じ取ることができる。

また、訳者あとがきにも触れられているが、大半のページに訳注が登場し、人物プロフィールから専門・業界用語の補足説明、原書の文や式に関する補足説明、間違いやすい読み方の注意喚起な

ど、教育的な内容が最新の詳報に基づいて数多く盛り込まれており、これらはこれから銀河に関する様々な論文を読んでいく際に非常に手助けになるだろう。また、人物に関する訳注には、天文関係+αの情報付きで、天文学者の意外な生き様を知ることができる楽しさがある。これらが翻訳本である本書の特徴と言えるだろう。

本文は八つの章で構成されており、1章は、“宇宙の中の銀河”というタイトルで、銀河系から宇宙論までの歴史的な発見を紹介し、距離測定や宇宙のスケールに関する事項を取り扱っている。また、“銀河は宇宙のビルディングブロック”という文面も登場し、天文学・宇宙物理学における銀河研究の意義も示されている。2章から6章までは“銀河のタイプ”の章から始まり、銀河のタイプ別（“楕円銀河とレンズ状銀河”，“渦巻銀河”，“不規則銀河，矮小銀河，低表面輝度（LSB）銀河，活動銀河”）に主要な研究トピックスやよく使われている関係式などが詰め込まれている。7，8章はさらにスケールを広げ，“銀河団とクラスターリング”，“銀河進化”の章になっている。

上記の本文に加え、さらに詳しく学びたい場合は、末尾に訳者の竹内氏による丁寧なガイド付き参考文献一覧がある。この参考文献一覧は今後の学習に役立つだろう。また、本書の原文を書いた著者フィリップス氏の“はじめに”の項で、本書に関する特設サイトのURLが紹介されている。そこには、望遠鏡やプロジェクトなどに関するwebサイトのリンク一覧や本文の修正事項などの情報が載っている。今後の情報の充実に期待したい。

銀河研究を始める際、とりあえず手元に置いて読んでみる教科書として非常に心強い一冊である。

松本尚子（国立天文台水沢VLBI観測所 研究員）